



コイウタ



山口亜哉子

目次

一夜.....2

鏡

戒

忘却.....3

呪文

水際

切.....4

微睡

電話

真実.....5

淵

待宵.....6

暗転

連続

記憶.....7

薄明.....8

想出.....9

来訪

恋文

決壊.....10

一夜 ヒトヨ

わたくしは惚れつぽい女で
しかも忘れやすい女であるので
明日には貴方のことも忘れてゐるでせう
けれども今宵だけは
貴方を想うてゐてもよろしいか
恋をしてゐるといふ幻想に酔うてもよろしいか

一一二〇〇一年六月二十二日

鏡 カガミ

貴方を想ひながら
唇に紅をひく
貴方はゐないのに
けして逢へぬのに

一一二〇〇一年六月三十日

戒 イマシメ

真剣に生きてゐないわたくしでは
貴方の前には立てませぬ

一一二〇〇一年七月十八日

忘却 バウキヤク

この痛みも
やがて色褪せ
時とともに消え失せてしまふのでせう
願はくば
その日が一秒でも先でありますやうに
一一二〇〇一年八月九日

呪文 ジュモン

逢ひたいと
百度唱へたら貴方に逢へますか
千度唱へたら貴方に逢へますか

何度唱へても
逢へぬのはわかつてゐるのに
一一二〇〇一年八月十七日

水際 ミギハ

泣きたくなるくらゐ
想ひ出が胸にあふるときは
目を閉ぢて
静かに波に浸りませう
流されてしまへ
それはきつと幸せな瞬間
一一二〇〇一年八月二十二日

切 セツ

わかつてゐるのです

貴方が去つたあと

逢ふ前よりも哀しくなるといふこと

それでもわたくしは祈る

どうかもう一度 貴方に逢へますやうに――

――二〇〇一年九月六日

微睡 ビスイ

貴方の夢で目覚めた朝は

何刻までもまどろんでゐたい

もう少し此のままみさせてくださいまし

せめて夢の匂ひが

時に融けて消えてしまふまで

――二〇〇一年九月十五日

電話 デンワ

受話器の向かふ

突如聞こえてきた声に

息が止まりさうになつた

こんな不意の幸せがあるから

わたくしは生きていられるのでせう

――二〇〇一年九月二十五日

真実 シンジツ

気づいて欲しいのか
気づいて欲しくないのか
人の心と云ふものは
自分だからとてわかりはせぬ

ただひとつ確なること

少しでも長く
貴方の傍にゐたいのです

一一二〇〇一年十月八日

淵 フチ

この昏い井戸の底でも
ふたりに未来永劫過ごせるのなら
喜んでわたくしは貴方と堕ちませう
さう願うたのはとある物語の姫でございます

井戸の端にてそれを眺むるとき
少しはわかると申しますれば
貴方は笑ふのでせうか

一一二〇〇一年十一月四日

待宵 マツヨヒ

貴方の訪れが雪をもたらすのならば

わたくしは雪を愛ませう

貴方の訪れが風を呼ぶのならば

わたくしは風を愛ませう

雲も 雨も 光も 闇も

目に映る全てを

わたくしは愛ませう

一一二〇〇二年一月二日

暗転 アンテン

重い、重い石を抱いているやう

暗い、暗い淵を覗いているやう

あんな些細なことで

これほど自分が脆いとは思ってをりませんでした

わたくしは笑ってみたいのに

貴方がゐなくても

一一二〇〇二年四月四日

連続 レンゾク

今日も何時もおなじ一日

貴方にけして逢へぬ一日

変わったことは何も無いのに

何故だか不意に泣きたくなつた

一一二〇〇二年七月五日

記憶 キオク

もしもわたくしが死んだとき
わたくしの一番覚えてゐて欲しい人は
わたくしを覚えてゐてくれるでせうか

一一二〇〇二年九月十一日

薄明 ハクメイ

泣きながらわづかに眠っていたやうでござります
いつしか外はしらじらと明け
夢と現の境もつかぬ濁った頭で
昨夜の全てが夢だったのではないかと思ふ

わたくしは恋を失ひました

一一二〇〇二年十月十三日

想出 オモヒデ

この棘は
光でできてゐるの
痛くて
そして いとほしい

一一二〇〇二年十一月三日

来訪 ライハウ

今年は冬の訪れが早いやうです
此方では昨夜うつすらと積もりました
貴方の処は如何ですか
此処より冬は厳しいでせうか

白い雪を見る度に、
貴方のことを想ひ出します

一一二〇〇二年十一月十一日

恋文 コヒブミ

出せぬ手紙を書きませう
云へぬ想ひを綴りませう
心の中で
何度も何度も
今となつては遅すぎるけれど

一一二〇〇二年十一月二十日

決壊 ケックワイ
崩れ落ちて仕舞へれば良い

人目も気にしないで
身も世もなく泣き喚いて
逢ひたいと
たゞ 貴方に逢ひたいと
叫べるなら

一一二〇〇二年十一月二十三日

コイウタ

<http://p.booklog.jp/book/51520>

著者：山口亜哉子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ayaapril/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51520>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51520>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ